

(論文)

旅のマテリアリティと真正な経験に関する記号論的考察

—旅の偶然性がもたらす経験について—

A Semiotic Consideration of the Materiality and the Authentic Experience of Travel

-On the Experience Grown by Contingencies of Travel -

佐古 仁志*

Satoshi Sako

要旨

本稿の目的は、旅の歴史を概観することで、観光旅行を含む旅の真正性について検討し、旅がどのようにして「真正な」経験をもたらすのかを記号論的観点から考察することにある。特に、本稿では旅が持つ偶然性に注目する。旅が基本的に目的や計画を持つものでありながら、ある意味でその予定が覆される場面における「驚き」が「真正な」経験をもたらすということ、グローバル化とともに世界の「外」がほとんどなくなった現在において、旅が私たちにマテリアリティとしての「外」の経験を与えてくれるとともに、成長させてくれると論じる。

キーワード： 旅 真正性 偶然性 マテリアリティ 驚き

1. はじめに

私たちはなぜ旅をするのだろうか。それは仕事や留学のためのものであるかもしれない。あるいは仲の良い友人や家族とふだん味わえない経験をし、日々の仕事や生活の疲れを忘れてリフレッシュするためであるかもしれない。また、敬虔な信仰者たちのように聖地を巡礼するためであるかもしれないし、戦争を含むさまざまな災害のために、やむなく故郷を離れ、あらたな安住の地を探しているのかもしれない。

このように旅には、自発的になされるもの、必要に迫られて行うものなどさまざまな形態がある。では、これらの旅は通勤や通学、あるいは居間から台所へ、買い物するためスーパーに行くといった

* 東京交通短期大学運輸科専任講師 ssako@toko.hosho.ac.jp

旅のマテリアリティと真正な経験に関する記号論的考察

移動と何が異なるのだろうか。本稿ではこれらの旅の共通点が、旅立ち、移動、到着という構造と、その構造が私たちにあらたな経験をあたえ、私たちの成長を促すところにあると考える。そのうえで、旅がそのように私たちを成長させることができるのは、旅がもつマテリアリティ、つまりは私たちの思い通りにならなさとしての偶然性とそれとともに生じる驚きにあるということを記号論の観点から論じる。

具体的には、これまでの旅の歴史と真正性について考察し、旅には共通する構造があることを提示する。それから人類学者 T. インゴルド (T. Ingold) による輸送 (transport) と徒歩旅行 (wayfaring) の区分、パフォーマンス論的転回を参考にしながら、旅の特徴がマテリアリティとしての偶然性にあると提案する。そのうえで、記号論の観点からそのような偶然性こそが私たちの成長を促す「真正な」経験を生じさせるということ、さらにはそれらの経験が紡ぐ線こそが、人生としての旅を通じて私たちのアイデンティを形成するものであると論じる。

2. 旅の変遷

人類がアフリカでの誕生以来、有史以前から狩猟・採集などの活動を通じて、さらにはよりよい生活の場をもとめて、広い範囲を移動していたということは、一般に認められている。また、多くの人が土地に根づき定住するようになってからも、旅という活動（移動）は継続してなされてきたし、現在では旅をしたことがない人などいないといえるまでに、日常的な営みとなっている。ここでは旅がどのように変遷し、それとともにどのような形態が生まれたかについて確認する。

2.1. 古代

リードは『旅の思想史』(Leed [1991]) のなかで、古代における旅 (journey)¹ の概念を、長く苦しい受難や試練を通じて人間の宿命性と必然性とを解明するものととらえ (前掲、pp. 7-8)、英雄的な旅と非英雄的な旅とに区分する (前掲、pp. 26-35)。英雄的な旅とは、『ギルガメッシュ叙事詩』や『オデュッセイア』といった叙事詩に代表されるように、神の啓示にもとづくことで旅が開始され、長く困難なできごとを経験しながらも最終的には出発の地に戻る円環的な旅であり、その目的は主体の空間的・時間的拡張と権力と地位の誇示にある。他方で、非英雄的な旅は、『旧約聖書』におけるアダムとイブの楽園からの追放が典型的であるように、必要に迫られたものであり、元の地に戻るものではない一方向的なものである。

以上のように古代の旅を特徴づけることができるのは、それらがたんなる物語や伝説ではなく、当時の人々の実際の旅に対する印象が結実したものであるからといえる。先史時代におけるグレート・ジャーニーや一部で現在まで続いている遊牧生活はもちろんのこと、少なくとも紀元前3000年ごろのバビロニアやエジプトにおいては交易や軍事遠征、統治というかたちの旅が行われていたことが確認されているし、紀元前1500年ごろには、余暇の旅や宗教的関心あるいは好奇心からピラミッドを訪れる旅がなされていた²。しかし、これらの旅が快樂というよりも苦難を伴うものであったという点

¹ 一般に英語では長期間の旅を journey、中間期間の旅を travel とすることが多く、リードも特にこの違いについて記述していないため、本稿では日本語の語感の問題等から特に区別せず使用する。

² おそらく紀元前6世紀までにはバビロニアで寺院や観光名所を巡る旅、さらにはそれらへの落書きがなされていたことが確認されている。ギリシアでは寺院などの観光施設だけでなく、スポーツ観戦のための旅もなされ、宿泊施設がもうけられ、ガイドブックも作成された。ローマでも馬車などの乗り物の発展とそれに伴う交通網の

(Holloway & Humphreys [2022]、p.22) は、まさに古代の旅が試練であったことを示す証拠といえる³。

田村 ([2013]、pp.1-50) が書いているように、日本においても年代は後だが、7世紀の中央集権的な律令国家の誕生に伴う納税や統治のため、防人のように国家防衛の軍事のため、遣隋使・遣唐使などの交易・学問のために公的権力により強制的な形で旅が行われた。また、8世紀中葉には貴族という特権的な階級の人々により享楽主義的な旅がなされたという点は旅の変遷という点で興味深い。

2.2. 中世

中世において、旅概念は古代の英雄的な旅と非英雄的な旅とが結び合わされた、高尚な新しい種類の騎士をモデルとしたものとなる (Leed [1991]、p. 26)。そこにおける旅は、12世紀の叙事詩『イーヴアン、または獅子の騎士』におけるイーヴアンの旅のように、それまで自我や地位が埋め込まれていた土地や場所との結びつきが失われ、その結果を通じて仲間の資格が得られることになる旅であり、古代の旅のように運命ではなく、選択をあらわす旅である。それは土地(血縁)ではなく、まさにその旅(の諸々の選択)により当人の人格を証明し高める旅であり、古代の旅と異なり、旅の危険や危機に積極的な価値を与えることで冒険の旅へとつながる(前掲、pp.36-37)。またそれと関係して、旅は特定の場所から切り離され、経典のような書物を中心とする旅へと組織化されることで、巡礼⁴につながることを(前掲、pp.148-149)。

古代の英雄的な旅は、中世において自由な選択とそれらの選択を通じた自己の証明、さらには自己の発見という個性を実証する旅へと変化した。また、この変化が、近代の科学的な遠征や好奇心旺盛な旅行者の旅に代表されるあらたな種類の発見の旅をもたらしこととなる(前掲、pp.12-13)。

中世の旅は、ローマ帝国の崩壊に伴う暗黒時代には危険なものとなり、その大部分が交易のため、さらには放浪芸人や学生などによる仕事としての必要に迫られたものとなっていたが、11世紀後半からは交通網の整備や十字軍の遠征などとともに、徐々にローマやサンティアゴ・デ・コンポステラなどへの聖地巡礼が盛んになった(Holloway & Humphreys [2022]、pp. 24、安村 [2001]、pp. 35-37)。また、15世紀半ば以降には、経験の浅い職人が遍歴職人として他国での修行を余儀なくされたということ、さらに芸人や学生がさまざまな場所を放浪したという事実(森 [2023]、pp. 66-72)は、都市における人口の増加などの背景があるとはいえ、中世の旅の特徴が土地から切り離された自己を獲得・証明するものであったことの証拠となるだろう。

また、ヨーロッパではマルコ・ポーロが、20年以上にわたって当時のヨーロッパにおいて未知の世界であったアジア全域にわたって冒険といえる旅を行い、さまざまな驚くべき知識を『東方見聞録』としてもたらし。そのほかにもアジアでは三蔵法師・玄奘が、中東ではイブン・バトゥータが、

整備に伴い現代観光の起源ともいえる「楽しみのための旅」がなされた。ただし、海外の親類を訪ねる旅はあったものの、これらの旅の多くは特権階級に限られていたし、5世紀のローマ帝国の滅亡に伴う交通網の荒廃とともに500年以上の空白の期間が生じることとなった(Holloway & Humphreys [2022]、pp. 22-24、安村 [2001]、pp. 34-35)。加えて、これらの好奇心の源には、自分たちの起源や秩序の中心をたどることがあった点も重要である(Leed [1991]、pp.133-148)。

³ 旅を意味する英単語 travel のもとの形は、travail であり、この語は苦痛や骨の折れる努力に由来する(Holloway & Humphreys [2022]、p. 22)。

⁴ 巡礼の起源は祝宴と祝典にあり、巡礼を通じて、法、血縁、宗教、氏族など共通の絆、つまりはあらたな集団を形成するものであり、それは現在の観光旅行にも引き継がれている(Leed [1991]、pp.243-244)。その意味で、巡礼は、旅人を罪の土地から浄化し、清め、引き離すものでもあった(前掲、p.11)。

それぞれ巡礼と結びついた形ではあったものの、それぞれの地域において知られていなかった知識を、長期にわたる冒険であるとともに学びの旅で獲得し、還元している。これらの旅は、さらに『東方見聞録』の影響を受けたコロンブスをはじめ大航海時代の冒険へとつながるものでもある（森 [2023]、pp. 39-45、83-97）。

加えて、日本においても先に触れた遣隋使・遣唐使は強制的な側面はあったものの、長期にわたる異国への旅であると同時に、さまざまな知識を帰国後もたらしたという点で、マルコ・ポーロやイブン・バットゥータの冒険の旅に比することができるものである。12世紀以降には、日本でも街道などが整備され、貴族・武士・僧侶のほかに、商人や芸人などの職能人の旅も増え、熊野詣やあらたな中心地としての鎌倉への旅などがなされるようになった点や、この時期に自発的な一人旅が増え、特に歌僧が漂泊の旅を行った点（田村 [2013]、pp. 51-96）は、日本においても巡礼などを通じて、土地から切り離された自己を証明する旅がなされていたと考えることができるだろう。

2.3. 近代

中世末期、ルネサンス期における人文主義の到来において、旅のもたらすさまざまな変容が知性を先鋭化させるという前提のもとに、旅は教育を仕上げる、楽しい訓育の手段とみなされるようになったし、それは17、18世紀の科学の旅へとつながることとなる（Leed [1991]、pp. 59-60）。近代において旅概念の要点は、古代の運命・苦難、中世の選択・自己の証明から、観察（あるいはまなざし）へと移ることになる。つまり、近代においては、16世紀以降の馬車の改良を伴う交通網の整理や啓蒙主義と結びつくことで、観察し、客観的なデータを集め、比較・考察し、世界の全体像を表出するという理性の働きが旅の特徴となったのである。

リードが書いているように（前掲、pp. 179-184）、ルネサンス期に、それまでいかがわしい欲望とされてきた好奇心が、印刷技術の発展とそれに伴う知識の安定化により望ましい動機として正当化され、神聖視されることになった。それは知識が安定化することで旅人が既知のものを前提することが可能となり、すでに知られている情報に追加できるものを獲得することができた旅、つまりは発見の旅が意味のある旅、旅行記となったということである。また、フランシス・ベーコンがもたらした帰納と観察に基づく科学の普及は、客観性という概念を旅にももたらすこととなり、結果として、近代において旅人は、誤りを正し、観察が持つ限界を認め、個人的経験の偏りを認める科学的な旅人とみなされるようになった。

このような近代の旅概念、特に観察の重視ということが、ルネサンス期に生じた若き紳士が教養に磨きをかける旅であるグランド・ツアーを正当化し、さらには現代へと続く観光旅行（tour）⁵へとつながることとなる。グランド・ツアーとは、ルネサンス期に始まり、17世紀から19世紀にかけてヨーロッパで盛んになった貴族の子弟によるヨーロッパ歴訪の旅である。これは中世の若き騎士の遍歴の旅と同じく中世の若き学者が学問の中心地を巡る旅とが融合した自己啓発と修養の旅であったが、次第にガイドブックが発行されるなど楽しみのための旅となり、19世紀後半にはトーマス・クックが鉄道の発展とともに現在のパッケージ旅行・団体旅行の原型を考案し、現在の観光旅行へとつながることとなった（前掲、pp. 184-185、Holloway & Humphreys [2022]、pp. 26、森 [2023]、pp. 134-142）。

⁵ 本稿では、tour という語に対して、文脈に応じて、「観光旅行」「観光」「ツアー」とあててるが、特に断わりのない限り同じ内容を意味している。

他方で、この旅においては、若き旅人たちを指導・監視する家庭教師が付き添っており、観察の手順や独特の記録の方法の指導などがあり、その旅行記は、世界の情報を収集する客観的で科学的なものとなり、ダーウィンやフンボルトなどの科学的な探検旅行を導くこととなった (Leed [1991]、pp.185-192)。

日本においても鎖国という特殊事情はあったが、教育的な旅から楽しみの旅、さらには観光へという傾向は同様である。江戸時代の参勤交代などで街道網の整備がいつそう進んだということもあり、伊勢参宮は巡礼の形式はとっていたものの実質的には楽しみの旅であったし、18世紀には『東海道中膝栗毛』のようにさまざまな理由はつけられてはいたが、実質的な観光旅行がなされていた (安村 [2001]、pp. 43-46、田村 [2013]、pp. 97-210)。また、俳人松尾芭蕉に代表される旅の形式は、科学ではなく詩ではあったが観察の旅であったといえる (Leed [1991]、p.218)。また、明治維新前後から、密航を含め教育的な海外留学が増えたということはあるが、それまでの鎖国政策の影響によるものといえるだろう⁶ (田村 [2013]、pp. 211-252)。

2.4. 現代

19世紀半ばに蒸気機関車による鉄道や蒸気船の定期運航といったあたらしい交通網が整備され、その後、20世紀に入り旅客機が世界各地をつなぐようになった。そして、そのことはリードが述べるように (Leed [1991]、p.286)、いまやひとつの世界でしかないという実感とともに、外に向かう、過酷で、危険な、個性を際立たせる「本当の旅」に対する喪失感を生じさせている⁷。

他方で、上流階級以外の者が労働や仕事と関係のない理由で何かを見に行くということがほとんどなかった近代以前に対し、現代においては「大衆が基本的には仕事と関係のない理由で、時期を問わずに出かけ、何かにまなざしを向け、そこに滞在する」(Urry and Larsson [2011]、p.6) という観光旅行がきわめて一般的になっている。

では、現代の旅概念ともいえる観光旅行の概念とはどのようなものだろうか。観光(旅行)の定義には、「楽しみのための旅行」といった最大公約数的な定義のほかに、「一時的滞在地において他所で取得した収入を消費すること」など多数あるが(岡本 [2001]、pp. 2-5)。本稿では、まなざしという観点から観光をとらえているアーリとラースン (Urry and Larsson [2011]、pp.4-5) が強調する、次のような観光の共通性質に注目する。①観光は制度化され組織化された労働と対比されるものとしての余暇活動である。②空間的移動と一定期間の滞在を伴う。③住まいや労働のある通常の場合以外の場所へと向かうとともに、一定期間滞在し、家へと戻るものである。④まなざしが向けられるのは労働と対比される場所である。⑤集団的な性質を持つ。⑥目的地としてのまなざしの対象は楽しみに基づき選ばれる。⑦日常経験と切断されるような風景と街並みに向けられ、こだわる。⑧まなざしは記号を通して構造化される。⑨まなざしの対象は次から次へと最新の観光のまなざしの対象の再生産を行い、複雑かつ、変容する階層の中に置かれる。

以上のように特徴づけられる観光概念、すなわち現代の旅概念の要点は、旅人が絶対的なものを避

⁶ 日本近代観光の特徴としては、さまざまな会社や学校など様々な単位での団体旅行、特に、修学旅行が現代にまで続くものとなっている (安村 [2001]、pp. 46-47)。

⁷ ただし、一部の人が、特に近年では金銭的に豊かな人々が、地球の外、宇宙へと旅することが可能な現在の状況は、ある意味で、中世、近代における外への旅と同じ状況にあるといえるし、この意味での「本当の」旅を行うことができるのはもともと限られた人々のみであるともいえるかもしれない。

け、その基盤が暫定的であることを自覚する本質的に比較に基づくものであり、また、客観的で外的で普遍的な理想を求めるなかで差異や持続するものに鋭敏なものである (Leed [1991]、p.287)。すなわち、近代における観察という点を引き継ぎつつも、匿名的な移動のなかで比較・対立という戦略のもとに差異を重視するものとなっている⁸。

近代の鉄道網の整備や客船の大型化・高速化、さらには、20世紀初頭の自動車ブームの到来などとともに、観光旅行が古代における限られた地域のものから世界的な規模で大衆化、団体化され、20世紀後半にジェット旅客機の時代が到来すると国際的にマス・ツーリズムが隆盛し、たんなる楽しみのためだけではなく、いまや観光産業として経済的な活動としても重要なものとなっている。

このような観光旅行は貧富の差や環境問題への意識の高まりとともに、1980年代にはマス・ツーリズムにかわるオルタナティブ・ツーリズム、さらにはポストモダンということで「あらたな観光のあり方」としてエスニック・ツーリズムやエコ・ツーリズムなどあらたなあり方が模索されているし (安村 [2001]、pp. 50-54)、近年ではインターネットやコンピュータ、スマートフォンの普及とともにデジタル・デバイスやデジタル空間をも利用した形のものも生じている (鈴木 [2021]、安田 [2019]、山田 [2021])。

もちろん世界中、全時代の旅が網羅できているわけではないが、これまで見てきたそれぞれの時代の旅の形態が地域による時間的なずれなどを含みながら、さらには古代の宿命・運命的な旅から中世の選択・自己証明的な旅、さらにはそれ以降の教育的な旅、差異化の旅と旅の形態が時代とともに変化しながら現在に至っていると考えることができるだろう。

3. 旅の構造と真正な経験

前節では旅の変遷について確認したが、トーマス・クック社の発足当初から観光旅行 (パッケージ旅行) は旅 (トラベル) とは言えないという批判はなされていたし (大橋 [2016]、p. 14)、円を描く道具を意味するラテン語 (tornus) に由来するツアー (tour) という語が、1930年代に一般に使用され始めた (岡本 [2001]、p. 6)。

本節では、しばしばそれらの違いの要点とされる真正性 (authority) にまつわる議論とそれらに共通する構造について確認したうえで、インゴルドの輸送と徒歩旅行の区分を参照する。そうすることで、観光旅行と旅の違いは共通構造における強調点の違い (出発と到着を強調するか、移動を強調するか) にあると論じ、観光研究におけるパフォーマンス論的転回を確認することで、旅の真正性が偶然性としてのマテリアリティ (materiality) にあると提案する。

3.1. 観光旅行と旅の違いとしての真正性

D. ブーアスティン (D. Boorstin) は、初期段階の観光研究において、旅 (travel) と観光旅行 (tour) とを、旅が多くの場合、仕事のためのものであり、能動的に経験や冒険、さらには人々との出会いを求めるものであるのに対し、観光旅行を受動的な楽しみのためのものであると述べている (Boorstin [1962]、p.85)。そのうえで、観光旅行者は、旅先での出会いよりも、ガイドブックなどにより事前に得られていたイメージが確かめられるときに、もっとも満足するとして観光旅行を疑似イベントで

⁸ この差異化は「観光旅行者の最大の特徴は、ほかの観光旅行者やそのような人々が集まる場所を避けたがる」 (Leed [1991]、p.287) という点に端的に現れているといえる。

あると指摘する（前掲、pp.108-109）。つまり、観光旅行には旅が持つ真正性が欠けていると主張するのである。

以上のようなブーアスティンの問題提起を引き受けつつ、D. マキアーネル (D. Maccannell) は、ゴフマンの「表舞台 (front region)」「舞台裏 (back region)」という用語を利用して、観光旅行者もダンスショーのような表舞台上で上演される疑似イベントだけでなく、ホテルのキッチンのような舞台裏での現地の人々の生活のようなより日常の真正性を求めていると指摘する (Maccannell [1991]、pp.103-105)。さらに重要なことは、舞台裏だと見せられたところが、あらかじめそのようなものとして作られている「演出された真正性」でありうるという点である（前掲、pp.98-99）。その意味で、表舞台と舞台裏とは交差しているともいえるし、常に舞台裏があり続けるともいえる。

以上の議論が、人々の主観から切り離されたものとしての真正性があるという立場（客観的真正性）であるのに対し、E. コーエン (E. Cohen [1988]) や E. M. ブルーナー (E. M. Bruner [1988]、pp. 379-380)、J. カラー (J. Culler [1981]) は、構築主義的真正性と呼ばれる立場にある。たとえば、オーストラリアの国立や地域の遺産は、保存されたり復元されたりしたものであるが、真正なものとして受け止められているし、ディズニーランドは企画されたエンターテインメントであるが、いまや真正なアメリカの伝統である (Cohen [1988]、pp. 379-380)。その意味で、観光旅行者はたんなる観察者ではなく、現地の人々を含むさまざまな交渉を行うのであり、真正性はそのなかで社会的に構築されるのである（前掲、p. 374）。

N. ワン (N. Wang [1999]) は、以上のものを含む観光旅行における真正性の議論をまとめたうえで、第三の立場として、実存的真正性 (existential authenticity) を提案している。実存的真正性においては観光旅行者の経験に注目することで、観光の対象が本物 (real) かどうかは問題でなくなる。そこで重要なのは、観光活動を通じて「存在の実存的状態 (existential state of Being)」に没頭することができる経験であり、そのような経験を通じて真正な自己を探究することにある（前掲、pp.358-361）。

では、このような実存的真正性とは具体的にはどのようなものになるのだろうか。ワン（前掲、pp.361-365）は、実存的真正性を個人内のもの (intra-personal) と対人関係的なもの (inter-personal) とに分け、次のように説明している。個人内の真正性としては、ビーチで休暇を過ごすときのように、観光を通じて日々の労働の統制から解放されるときに感じる身体感覚 (bodily feelings) に関わるものと、登山家が登山を通じて困難を克服することで感じるような、ルーティン化した日常生活における喪失感を回復させる自己形成 (self-making) に関わるものとがある。

また、対人関係の真正性については、家族の絆 (family ties) に関わるものと、観光コミュニタスに関わるものとがある。家族の絆に関わる真正性は、観光を通じて親密さや情緒的つながりなど家族関係における真正なつながりを経験することで強化される。コミュニタスとは、V. ターナー (V. Turner [1973]) が論じたもので、巡礼など境界状況において生じるもので、日常の義務から解放され、地位や役割などがあいまいな、人間同士の平等な連帯感で結ばれる状態のことである。ワンは、観光旅行においても同じような状態が生じ、実存的真正性を経験することができると主張する。

観光研究における真正性に関する議論は、客観的真正性に対するそもそもそのようなものは存在するのかという批判から、観光活動の交渉可能性を強調する構築的真正性、さらには真正な自己の探究を強調する実存的真正性へと展開してきた。しかし、橋本 ([2011]) は、観光旅行者が「真正な経験」

を求めることは認めつつも、「観光対象が（本質的な）真正性を（神なる存在から）賦与されているかどうかに関係なく、（神はもはや存在しないのであるから）観光者が自ら選択し経験した観光を、自らの責任でいかに享受し真正なるものと評価するのが問われることになる」（前掲、p.227）という実存的アプローチに対し疑念を呈する。そのうえで、現代の観光者は、観光対象が観光用に切り取られていることを承知したうえで、たとえばショーの上演者がどれほど真剣に取り組んでいるかといった対象が持つ「真摯さ」を真正性の基準として評価していると主張する（前掲、pp. 242-244）。

以上の議論に加えて、観光行動が余暇活動としてあるいは観光対象などとの関係で、①休息型、②気晴らし型、③自己実現型、あるいは①鑑賞・体験型、②活動型、③保養型や①流動型、②目的型、③滞在型など分類されること（岡本 [2001]、p.17）をふまえるならば、旅と観光旅行をいずれのものにせよ真正性の基準で区別することは難しいだろう。また、「楽しみのための旅」という点でも紀元前5世紀には、「世界の七不思議」という言葉が使われている（森 [2023]、pp. 45-47）。これほど多くの人々が関わるようになったのは近代以後であることは認めるとしても、観光旅行は昔からある旅の形態であり、私たちの成長を促すものである。次では、旅が持つ構造的性について考察する。

3.2. 旅の構造

最初にも確認したように、旅が移動を伴うものであることを否定する人はほとんどいないだろう⁹。リード（Leed [1991]、p. 26）は、移動性（mobility）において、旅の構造を特徴づけるべきごととして旅立ち（departure）、移動（passage）、到着（arrival）の3つをあげる。また、このような旅の構造は、安村（[2001]、p. 40）が指摘するように、若者が郷里を旅立ち（分離）、危険を乗り越え（移行）、帰郷して復帰する（再生）という通過儀礼と同じパターンであるが、このパターンは観光にも継承されており、旅を貫く構造ということができよう。

旅立ちには上で見たように、古代における王になるかもしれない者の英雄的な旅立ちや、宿命的な苦難な旅立ち、中世における騎士がモデルであるような自己を証明するための旅立ち、近代における教育のための旅立ち、さらには近代・現代のように差異化のために観察し、楽しむための旅立ちなどいろいろなものがある。しかし、そのような旅立ちの本質をあげるとすれば、それは「個人を、個人に対し規定的働きをする社会的・文化的母体から切り離し」、別離の不安を喚起する（Leed [1991]、p. 26）ものになる。つまり、その動機に関わらず、私たちは旅に出ることで一時的か永久的なものかは別として、それまで属していた集団・共同体から離れることで、自分を見つめなおし、あらたに形成することが可能となる。

他方で、到着は、「旅人が土地と一体化し、土地が門の前にたたずむ旅人が何者であるかを認知する過程」であり、「また、ひとと土地との一体感を育む過程」（前掲、p.85）である。その意味で、到着とは、その旅人が誰であるかという身元を確認し、それと同時にその土地へと組み込むプロセスである¹⁰。また、そこにおいて旅人が、その土地の環境に適応するために、個性を再創造し、仮面をつける

⁹ 鈴木 [2021] は、デジタル・ツーリズムにおける共同状況への没入体験についてふれているが、デジタル・ツーリズムも身体的な移動は伴わないかもしれないが、意識あるいは精神の移動は伴うといえるだろう。

¹⁰ 本稿では詳しく論じることができないが、リードが指摘するように（Leed [1991]、pp. 97-89）、旅人がまれであった近代以前における到着では、異人が単なる冒険者ではなく、神あるいは神の使いという選択肢があったということである。異人は領土内では得られない外部の情報をもたらすと同時に、領土内の人間の外部への幻想を代表する装置となりえたからである。

ことさえありうるという点も興味深い（前掲、pp.107-108）。旅立ちが共同体からの分離、自由、不安定化のプロセスであるならば、到着は共同体への編入、制約、安定化のプロセスであり、外部の情報をもたらすものとしての旅人の交渉のプロセスでもある。

以上のような旅立ちと到着とがそれぞれ土地からの分離と土地への所属に関わる体験であるのに対し、移動は境界を越える空間運動の体験という点で質的に異なる（前掲、p.56）。そもそも18世紀以前にはほとんど移動に関する資料がなく、このことは移動が安楽かつ快適で、例外的なことがないということを示すものでもある（前掲、p.55）。

また、移動は土地・共同体から切り離されることになるため、土地・場所・領土におけるのとは異なる独自の論理と秩序を持った体験、「あいだ（between and between）」という境界的であいまいな立場にある（前掲、pp.57-58）。さらに、移動は旅行者の体験に順序という秩序を課す。私たちは移動においてすべてを一度に見渡すことはできず、次々と現れる場面をその順序にしたがって見ることになるのであり、このことは科学的な分類秩序とは異なる継起的な秩序を与えてくれる（前掲、p.73）。

このように観光旅行を含む旅が旅立ち、移動、到着という構造で特徴づけられることを確認したうえで、次では現代における観光旅行が当初疑似イベントとして真正性を欠くものと捉えられた理由をインゴルドによる徒歩旅行と輸送の区別を参照することで明確にする。そのうえで、現在、観光研究などで注目されているパフォーマンス論的転回、輸送から徒歩旅行、さらには、旅立ちと到着の強調から、移動の強調への移行にあり、そこで目指されていることは自己の成長を促す経験の獲得であると論じる。

3.3. 移動の形式としての徒歩旅行と輸送

近代から現代にかけて、パッケージ旅行を含む観光旅行が普及した理由の一つに鉄道の普及があげられる。阿部（[2016]、pp.36-37）が W. シヴェルブシュ（W. Schivelbusch）に言及しながら指摘するように、鉄道の普及のおかげで、それまで上流階級など限られた人々のものであった旅を多くの庶民が経験できるようになった。他方で、鉄道は旅人たちから直接的感覚、つまりは自分がまさに移動した距離と時間に関する感覚（外的自然との結びつき）を奪った。そのことは、出発地と目的地との間の「中間の空間（旅の空間）」を抹殺し、旅人の風景を車窓から遠景を眺めるパノラマ的なものへと変容させ、さらには移動中の読書や居眠りなどのあらたな行動様式も生み出した。さらに、J. アーリ（J. Urry [2007]、pp.92-94）はこのような事態を移動の機械化と呼び、乗客たちは匿名化された肉の塊となってほかの商品のように運ばれるようになったとさえ指摘する。

このような移動の機械化に伴う旅の経験の変容が、先に見た観光旅行の真正性という問題を提起することになったのではないか。実のところ、そこで問題になっているのは、旅人の経験の成長ではないのか。このことはインゴルドによる「徒歩旅行」と「輸送」の区別を確認することでいっそう明確となる。

インゴルド（Ingold 2007、pp.75-84）によれば、徒歩旅行とはイヌイトの旅のように、絶えず動いている状態にあるものである。ある飲食店に行こうとするといったようにさしあたりの目的地はあるものの、混雑などの理由で、動いているさなかに別の飲食店へと目的地が変わるものであり、またそこから別の目的地（仕事場）などへと引き継がれ一本の線を形成する。徒歩旅行者は、そのような線に沿って進む道すがら、環境とさまざまな交渉を行い、それらに即座に対応し、そのような行為と共に成長する。徒歩旅行は、継続されるのはプロセスであり、私たちはそこで、環境にある手がかりへ

の感受性を豊かにし、判断のために利用できるようにする資質、つまりは環境と切り結ぶための即興の資質を獲得する。

それに対し、輸送は、目的地指向の移動であり、ある位置から別の位置へ横断して人や物資をその基本的性質が変化することのないように運搬する移動様式である。そこにおいて輸送される旅人は乗客として、場所から場所へと受動的に動かされる存在である。その間の風景や音といった環境の変化はあまりに早すぎて、彼らは切り結ぶことはできず、ただ目的地に広がる風景を目撃することを目的とする。インゴルドは観光旅行をまさに輸送の一例として挙げている。

また、オーストラリアのアボリジニの旅が自動車を利用していても徒歩旅行であり続けるように、これら2つの移動の区別は、機械的手段を使用するか否かではなく、徒歩旅行において見られる移動と知覚との親密なつながりが消失しているかどうかによってなされる。

以上の区別を考慮するならば、旅と批判の対象とされてきた観光旅行との違いは、(客観的) 真正性の有無ではなく、それが徒歩旅行であるか輸送であるかといえるだろう。この意味で、旅の真正性は、本当の自己の形成とまではいわないにしても、さまざまな状況に即興的に対応できる能力を成長させる経験にあるといえるのではないか。

このインゴルドによる区別とリードによる旅の構造、特に、旅立ち・到着と移動の対比を比較することで興味深い点が見えてくる。それは、観光旅行が旅立ちと到着というある意味で静止した点を重視しているのに対し、旅は人々を含む環境との交渉のなかで動きつつ成長することに要点があるということである¹¹。さらに真正性に関する議論をふまえるならば、旅にまつわる真正性は、旅の目的地(到着)にあるのではなく、そこに向けての、さらには目的地を通り抜けて家へと戻る移動にあるといえるのではないか。このことは近年の観光学研究におけるパフォーマンス論的転回とも結びつく論点である。次では、パフォーマンス論的転回についてふまえつつ、旅の真正性が身体の移動と環境のマテリアリティから生じると論じる。

3.4. パフォーマンス論的転回と環境のマテリアリティがもたらす真正性

近年の観光経験における議論において、安田([2019]、p. 25)が指摘するように、アーリが提唱した「まなざし」を中心とした表象に関わる研究から、自分以外の人間を含む環境とのコミュニケーションや相互作用といった環境のマテリアリティ¹²との関りの研究への移行、つまりは、パフォーマンス

¹¹ リードも「昔の旅する社会においてもそうだったように、現代の旅人社会においても、自己同一性は、仕事や労働を通じてではなく、地球的規模で組織化された消費、余暇、威信の取引によって達成される。われわれは、時にはわれわれの先祖以上に、われわれの食べているもの、飲んでいるもの、使っているもの、動かしているもの、そのものなのである。われわれは、われわれがそこから来た場所、今いる場所、これから向かう場所なのである」(Leed [1991]、p. 290)と述べており、インゴルドの言葉でいえば、徒歩旅行がアイデンティティを構成するものと考えている点は興味深い。

¹² 「マテリアリティ (materiality)」という用語は、太田 [2019] が指摘するように、その重要性が指摘されることは多いが、内容についての整理がなされているとはいいがたく、明確な定義が与えられているわけではない。太田はモノ、メディア、文化、身体のマテリアリティについてそれぞれ概観したうえで、「マテリアリティ」が①言語中心主義への批判、②相対主義的・懐疑主義的な視点への批判、③人間のエージェンシーを特権化することの批判を、それぞれ独立な仕方ではあるが可能にしているため要請されているのではないかと提案している。本稿での「マテリアリティ」は、目的地へと到達する、さらには、家へと戻る過程における広い意味での環境が持つ、私たち人間の決して思い通りにはならない側面のことを示す。その意味で、本稿での「マテリアリティ」は、太田が指摘する3つの批判を含意するものであるといえる。また、後で、グローバル化のなかで一見宇宙と深海くらいしか「外」がなくなってしまったように見える現在においても、実のところ、旅の環境が持つこのマテリアリ

ス論的転回が生じている。特に、観光研究に「まなざし」という視点を持ち込んだアーリは、そのまなざし論からパフォーマンス論への転回について、その特徴をラースンとの共著である『観光のまなざし 増補改訂』（Urry and Larsson [2011]）の8章において、次のようにまとめている。

1つめが観光旅行者は場所を体験するのに、視覚だけでなく多様な感覚を用い、反応しているということであり、2つめがゴフマンの演劇のメタファーを援用することで、テーマ化され、舞台化されている観光地の本質と、台本化され、劇場化された観光旅行者の身体化された動きを概念化するということである。そして、3つめに、観光の基本単位はチーム（team）であり、それぞれが日常生活から連続的な階級、ジェンダー、民族などの文化的コードをそなえているという点があり、4つめに、決められたルートを外れるといった逸脱行動やトラブルなどが生じる余地があり事前に決定しつくすことができないということ、5つめに場もパフォーマンスも確固としたものではなく、偶然性（contingency）¹³を伴うことがある。さらに、6つめに日焼けやビーチバレーなどのパフォーマンスを可能とするには砂浜が必要のように、カメラとか観光バスのようなモノがアフオーダンス〔行為の可能性〕を提供する、つまりは、環境中のモノがパフォーマンスを促進したり制限したりするということ、7つめに観光においては集団内での交流がなされるということがあり、最後8つめに、観光は書かれたテキストを読むようなものではなく、むしろそれをフィールド調査的に記述するということがパフォーマンス論的展開の特徴ということとなる。

このパフォーマンス論的転回の要点をまとめるならば、①観光旅行者の行為を支えるいつもすでに文化的にコード化されている身体、②観光旅行者の行為を促進したり、制限したりする環境のマテリアリティ、③実際の行為に伴う事前決定できない偶然性とその身体化という3点を挙げることができるだろう。つまりは、すでに文化という文脈を備えている身体が、観光地のマテリアリティと接触するときに、事前には決して予測できない仕方で行為＝パフォーマンスが生じ、それがその観光旅行者の経験に再帰的に影響を及ぼすということである。これまでの議論との関係で述べるならば、徒歩旅行という形式の旅において重要であるのは、目的地そのものではなく、目的地へと向かう環境中の移動のなかで旅人の身体が出会う偶然性にあり、その偶然性が再帰的な仕方でもたらしてくれる成長にあるといえるのではないか。

また、そのときパフォーマンス論的転回はそれ以前の観光研究が観光地・目的地における観光対象の真正性やさまざまな観光対象という点にだけ焦点を当てていたのに対し、まさにさまざまな観光地をめぐる移動の過程に焦点を当てる点で、インゴルドの徒歩旅行の視点を採用しているといえる。

パフォーマンス論的転回については、安田〔2017〕も、ツーリズム・パフォーマンスにおける偶然性の重要さを、（現地の人々を含む）環境中で出会うイベントなどに即興的に対応すること、さらにはそのような即興から生じる偶然性を許容する寛容さとの関連で論じている。さらに、ナレッジ・マネジメント論を参照することで、そこで構築される実存的真正性ととともに、観光実践を通じて制作され、蓄積されていく知識の重要性についても考察している。本稿では、次の節でこのような安田の提案にその全体的な流れについては賛成しつつも、偶然性は、計画通り、思い通りにふるまおうとする旅人に対して、環境のマテリアリティの抵抗という形で生じること、さらにはそのような抵抗としての偶然性から生まれる驚きこそが、まさに旅人を成長させる旅の真正性であるということを、記号論の観点から論じる。

4. 驚きと真正な旅の経験

旅の真正性が旅人の身体と環境のマテリアリティが出会うところでの偶然性、さらにはそこから再帰的な仕方でも得られる経験の変容（成長）にあるとき、具体的にはどのような仕方でも真正な経験が得

ティが、私たちに「外」を提供し、成長を促してくれると論じる。

¹³ 本稿では contingency を偶然性とする。日本の論者には偶有性と訳すものもいるが、偶然性と偶有性の違いが明確でないことが多いのと、少なくとも contingency の訳語と考えるとき、日本語における偶然性と偶有性の違いを英語における議論に持ち込むためには丁寧な議論が必要とされと考えるからである。

られるのだろうか。いいかえるならば、どのような旅の偶然性が真正な経験を与え、どのような旅がそうでないのだろうか。その一つの手がかりを与えるものとして記号論的視点を取り上げる。

観光研究における記号論的視点は、カラー（Culler [1981]）によるソシュール（Saussure）の記号学の流れを汲むもの、マキャネル（Maccannell [1991]）によるパースの記号論とソシュールの記号学とを組み合わせたものなどがあるが、観光というテキストを記号論により解釈、分析するものが多い。それらの試みの成果は認めつつも、ここではA. バーガー（A. Berger [2017]）がマキャネルの提案を受けて展開しているように、観光旅行を含む旅を記号論、特に記号活動（semiotic activity）の観点から、すなわち、表象だけでなく物質的なもの（マテリアリティ）をも含む形で考察する。その際、バーガーは、ソシュールとバルト（Barthes）を参照することで展開しているが、本稿ではパースの記号過程（semiosis）、特に、習慣形成における驚きの役割という観点から真正な経験の獲得過程について検討する。

4.1. パースにおける経験の変容としての習慣形成と驚き

パースは、偶然性としての一次性的、必然性としての二次性的、可能性としての三次性的という現象学的な分類、アイコン、インデックス、シンボルという記号機能の分類、アブダクション、演繹、帰納という推論の分類など広い意味での記号に関わる分類をさまざまに行っている（伊藤 [1985]）。ここで観光旅行者を含む旅人どのようにして真正な経験を得るのかということで検討したいのは、さまざまな営みを記号過程としてとらえるパースの習慣論、特にそのなかでも意味を獲得する方法についてである。これまでの旅および真正性に関する議論を考慮するならば、真正な旅の経験とは、旅人が環境のマテリアリティに出会うことで、行為を変容させ、習慣を変更させることで、つまりは環境からなにかあらたな意味を獲得することで成長させてくれるものであると考えられるからである。

パースは（知的概念の）意味を単に何かの対応関係を示すことや、できごとや属性の集積から構成されるものではなく、ある条件下ではある一般的な仕方で行うだろうという *would* つきの条件法的な形で記述され、予期を伴う肯定的判断に含まれるものと考え、究極的な論理的解釈項（「習慣」）と呼んでいる。そしてこのような習慣が形成されるのは、外的世界における不随意的なできごとをきっかけとして、内的世界に仮説（最初の論理的解釈項）が生じ（CP. 5. 481）、そのような仮説が、相対的な未来の想像という段階を経て究極的な段階に達することによると論じている。

本稿において重要であるのは、パースこのような習慣形成が、「驚き（surprise）」により始まると考えている点にある（佐古 [2016]）。私たちは階級、ジェンダー、民族など文化的コードとしてさまざまな習慣を持ちながら、日常生活を特に疑念を抱くことなく過ごしている。そのような日常生活でも、私たちはさまざまな「意味」を理解しながら生活しているが、そのとき「意味」が顕在化することはほとんどない。むしろ「意味」が問題となるのは、そのような日常から逸脱する状況、つまりは、私たちの習慣がやぶられる驚きの場面なのである。

では驚きとはいかなる状態なのだろうか。エクマンら（Ekman & Friesen [1975]）は、驚きの経験を、予期せぬ出来事と予期に反した出来事の2種類に区別している。また、イザール（Izard [1991]）は驚きを「刺激の急激な増加」と定義している。ただし、イザールが驚きを引き起こす条件として挙げるのは、雷鳴、発火装置の轟きといった突然で予期しない出来事のことである。両者において、細かな違いはあるものの「驚き」として重要なことは、（言語的とは限らない形での）予期に反している点であるとまとめることができるだろう。

このように記号論的な考察から、不随意的なできごと、特に驚きが、私たちの経験を変える出発点になるということを確認したうえで、旅におけるマテリアリティ、つまりは、旅において自分が予定し、計画した通りにならないことが、むしろ旅を真正なものとし、私たちにあらたな経験を与えてくれるということを論じる。

4.2. 旅と「外」としての驚き

あらためて旅について考えてみよう。旅には、旅立ち、移動、到着という構造がある。その旅立ちは運命・宿命的なものから、教育的・選択的な自発的なもの、さらには、楽しみのためのものなどがあるが、民族などの文化的コードは引き継ぐものの、基本的には、それまで属していた共同体から切り離される。そして、その旅の過程としての移動を通じて、環境のマテリアリティと出会うことや旅を共にする人々と一時的な集団を形成することで、受動的にあるいは自発的に自らを変化させ、その終着点となるあらたな地あるいは元の地へと適応し、再び日常の共同体へと戻る。

このような旅が、通勤や通学、あるいはスーパーに買い物に行くといった移動と異なるのは、旅が持つ旅立ち、移動、到着という構造によるものであり、そこで真正な経験が得られる点にあるといえるだろう。だからこそ近代において観光旅行が開始されたとき、その真正性が問題となり、批判の対象となったのである。加えて、現在において真正性は旅先の対象、あるいは観光対象が単独で持つものではなく、旅人や観光旅行者と、現地の人々を含む環境との出会いと交渉において得られるものと考えられるようになっている。

他方で、近代の長距離交通網の整備、さらには現代のグローバル化の社会において、受動的か自発的に関わらず、なにかあらたな発見をするために自分たちの「世界」の外にむけて移動することそのものがもはやほとんど不可能になり、私たちにできるのは、すでにガイドブックやインターネットなどですでに知っているものを確認する観光旅行だけであるという議論もなされている。

しかし、これまで確認してきたように、旅のポイントが、目的地をめぐることを含む移動と、その過程での環境との偶然の出会い、それに即興的に対応することから得られる真正な経験にあるとするならば、現在においても旅は可能であるといえるのではないか。記号論の観点から経験の変容としての習慣形成とそのきっかけとしての驚きについて検討したところから明らかなように、私たちの経験の変容、さらに言えば、真正な経験にとって重要なのは、「世界」の外ではなく、これまでの「自分の経験」の外だからである。その意味で、旅において重要なのは驚きであり、それはむやみやたらに偶然の出会いを求めて移動することではない。あらかじめ十分に調べ、企画し、予定したうえで、それにもかかわらず思いもよらないできごとに出会い、驚くとき、私たちは本当の意味での即興性を要求され、そこにおいてそのできごとをうまく処理できてもできなくても自らのあらたな可能性と限界を知ることで「真正な」経験を得ることができるのである。「世界」の外である宇宙へと向かう旅であろうと、よく知られた名所へと向かう観光旅行であろうと、私たちはその移動過程で驚き、真正な経験をし、自らの成長を楽しむことができるのである。

5. おわりに

本稿では、移動のなかでも旅が持つ特徴について検討するために、旅の歴史について確認した。その結果として、旅が旅立ち、移動、到着という構造を持つこと、さらに、旅と観光旅行の違いとしての真正性をめぐる議論を検討するなかで、旅の経験の要点が、旅人と環境とが出会う場面における偶

旅のマテリアリティと真正な経験に関する記号論的考察

然性にあることを明らかにした。加えて、記号論の観点を取り入れることで、そのような偶然性がもたらされるのは「世界」の外においてだけではなく、「自分の経験」の外において驚きという形によるものであると論じた。

以上のことからわかることは、移動、そのなかでも旅は、自らが所属している「世界」からいったん切り離されることで、日常であればなかなか変えることが困難である自分自身の習慣などを変え、成長する機会を与えてくれるということである。また、このように一時的にとはいえ「世界」から切り離されることで、自らを見つめ直し、成長する機会はある意味で、否が応でも自分自身のアイデンティティの変更を要請される機会でもあるといえる。

インゴルドが徒歩旅行ということで述べているように、私たちはさまざまな目的地へと旅をすることで、線を描く。そしてそのような線を描く移動の途中で、環境と出会い、やり取りをしながら自らの線をなす。このような線をなす個々の動きがアイデンティティを形成する機会であり、私たちは人生を通じて旅をし、アイデンティティ形成し続けているといえるのかもしれない。その意味で、私たちは生まれてから死ぬまで常に旅を続け、環境との偶然の出会いを通じて、真正な経験を得ることで自らの線を描いているといえるのではないだろうか。

6. 参考文献一覧

- 阿部純一郎 [2016]、「移動論的転回の中に「観光のまなざし」論を定位する」、『観光学評論』、第4巻第1号、観光学術学会、pp.33-42
- Berger, Arthur A. [2011] , “Tourism as a Postmodern Semiotic Activity”, *Semiotica* Vol.183, pp.105-109
- Boorstin, Daniel J. [1962] , *The Image; or, What Happened to the American Dream*, New York: Atheneum (星野郁美・後藤和彦訳 [1964]、『幻影の時代 マスコミが製造する事実』、創元社)
- Bruner, Edward M. [2005] , *Culture on Tour: Ethnographies of Travel*, Chicago: University of Chicago Press (安村克己、遠藤英樹、堀野正人、寺岡伸悟、高岡文章、鈴木諒太郎訳 [2007]、『観光と文化 旅の民族誌』、学文社)
- Cohen, Erik [1988] , “Authenticity and Commoditization in Tourism”, *Annals of Tourism Research*, Vol.15, North-Holland, pp.371-386
- Culler, Jonathan [1981] , “Semiotics of Tourism.”, *American Journal of Semiotics* Vol.1, pp.127-140
- Ekman, Paul & Friesen, Wallace V. [1991] , *Unmasking the Face*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall (工藤力訳 [1987]、『表情分析入門—表情に隠された意味をさぐる』、誠信書房)
- 橋本和也 [2011]、『観光経験の人類学—みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる—』、世界思想社
- Holloway, Christopher & Humphreys, Claire [2022] , *The Business of Tourism*, 12th edition. Sage Publications
- Ingold, Tim [2007] , *Lines: A Brief History*, London: Routledge (工藤晋訳 [2014]、『ラインズ 線の文化史』、左右社)
- 伊藤邦武 [1985]、『パースのプラグマティズム』、勁草書房
- Izard, Carroll E. [1991] , *The Psychology of Emotions*, New York: Plenum Press
- Leed, Eric [1991] , *The Mind of The Traveler: From Gilgamesh to Global Tourism*, Basic Books (伊藤誓訳 [1993]、『旅の思想史: ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』、法政大学出版局)
- MacCannell, Dean [1991] , *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, New York: Schocken (安村克己、須藤廣、高橋雄一郎、堀野正人、遠藤英樹、寺岡伸悟訳 [2012]、『ザ・ツーリスト: 高度近代社会の構造分析』、学文社)
- 森貴史 [2023]、『旅行の世界史—人類はどのように旅をしてきたのか—』、星海社新書
- 岡本伸之 [2001]、「観光と観光学」、岡本伸之の編『観光学入門』、第1章、有斐閣アルマ、pp.1-31
- 太田茂徳 [2019]、「<マテリアリティ>という視点の諸相—「これは論文ではない」—」、『空間・社会・地理思想』、22号、大阪市立大学文学部地理学教室、pp.45-62
- 大橋昭一 [2016]、「ツーリズムの記号論的展開過程：わが国における観光概念の規定の前進のために」、『観光学』、

第14巻、和歌山大学観光学会、pp.13-22

Peirce, Charles S. [1931-1958] , *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vols. 1-6, Charles Hartshorne and Paul Weiss (eds.), vols. 7-8, Arthur W. Burks (ed.), Harvard University Press, Cambridge (引用はCPと巻数とパラグラフ・ナンバーで表記)

佐古仁志 [2016]、「「意味」を獲得する方法としてのアブダクション：予期と驚きの視点から」、『ハイブリッド・リーディング』、叢書セミオトポス11号、新曜社、日本記号学会編、pp.239-254

鈴木謙介 [2021]、「オンライン・ツーリズムと観光体験」、山田義裕・岡本良輔編『いま私たちをつなぐもの：拡張現実時代の観光とメディア』、弘文堂、pp.22-40

田村正紀 [2013]、『旅の根源史ー映し出される人間欲望の変遷ー』、千倉書房

Turner, Victor [1973] , “The Center Out There: Pilgrim’s Goal”, *History of Religions*, Vol.12, North-Holland, pp.349-370

Urry, John [2007] , *Mobilities*, Polity Press (吉原直樹、伊藤嘉高訳 [201]、『モビリティーズ 移動の社会学』、作品社)

Urry, John. & Larsson, Jonas [2011] , *The Tourist Gaze 3.0*, Sage Publications (加太宏邦訳 [2014]、『観光のまなざし 増補改訂版』、法政大学出版局)

Wang, Ning [1999] , “Rethinking Authenticity in Tourism Experience”, *Annals of Tourism Research*, Vol.26, No.2, North-Holland, pp.349-370

安田慎 [2017]、「観えないオーディエンスとステージで演じるー観光研究におけるパフォーマンス論的転回をめぐる考察ー」、『帝京経済学研究』、第50巻第2号、帝京大学経済学会、pp.53-66

安田慎 [2019]、「共有されない空間、参照されるリズムーデジタル空間における宗教経験のリズム・フローをめぐる観光学的考察ー」、『観光学評論』、第7巻第1号、観光学術学会、pp.21-35

安村克己 [2001]、「観光史の見方と観光前史」、岡本伸之編『観光学入門』、第2章、有斐閣アルマ、pp.32-39

山田義裕 [2021]、「偶有性の触媒としての観光ー拡張現実時代の「共在」に関する一考察」、山田義裕・岡本良輔編『いま私たちをつなぐもの：拡張現実時代の観光とメディア』、弘文堂、pp.2-21